

JCE7ニュース

第7回日本伝道会議の準備が始まりました。諸教会、諸教団、そして多くの宣教団体の皆様、そして国内の外国語教会、国外の日本語教会の方々、また若い方々、信徒の方々も、みんなで福音宣教のために力を合わせたいと願っています。

日本伝道会議のこれまで

これまでの6回の会議を簡単にふりかえってみましょう。第1回の日本伝道会議は、「日本をキリストへ」とのテーマのもとに、1974年に京都において行われました。主講師はジョン・ストット師でした。1968年には「日本福音同盟」が誕生し、翌69年には「新改訳聖書」が発行されています。その後、第2回の会議は1982年に同じ京都で「終末と宣教」、第3回は1991年に那須塩原で「日本からアジア、そして世界へ」、第4回は2000年に沖縄で「21世紀の日本を担う教会の伝道—和解の福音—」、第5回は2009年に札幌において「危機の時代の宣教協力—もっと広く、もっと深く—」、そして、前回第6回は2016年に神戸で「再生へのRe-VISION～福音・世界・可能性～」とのテーマで開催されました。ちなみに、第3回までの会議は日本福音同盟（JEA）の主催で行われましたが、第4回からはJEAの枠を超えた実行委員会によって開催されるようになりました。より広い宣教協力の実現を願ってのことです。

振り返りますと、その初期においては、私たちのアイデンティティである聖書信仰を確認し、21世紀に入ってから、宣教協力のインフラを整えて継続的な働きを進めることに取り組んで来ました。前回の会議では、福音のすばらしさを再確認することからはじめ、時代と世界の文脈にある私たちの姿と、そして与えられた可能性を見直し、具体的な分野における宣教協力をプロジェクトとして進めるとともに、地域の交わりや教団教派をネッ

実行委員長
小平牧生



トワークとして結ぶ宣教協力の態勢をつくることを目指しました。そのような働きを通して深められた関係があり、広められた協力があり、強められたつながりがあります。そのようにして与えられて来たものを豊かに活かし、新たな変化を生み出し、それらを一つに結び合わせる努力をしながら、さらに将来につなげていきたいと願っています。

終わりから始める

JCE7のテーマは「『おわり』からはじめる『宣教協力』」です。1995年にJCE7の開催地である東海で行われた第3回東海宣教会議の講師であるロバート・コールマン師は「主の弟子として生きる」の終章で、「始めるべきところは、終わりのところ、つまり万物の完成における完成した教会のビジョンである」と語っています。神はこの世界のためにご計画をもっておられ、この時代に生きる私たちは前を歩んだ先輩たちからのバトンを受け継いでその働きをともに担っています。私たちの働きは小さく、必ずしも願うように進んでいるわけではないかもしれませんが、しかし、終わりの日に完成される神の国のビジョンを共有し、神が実現してくださることを先取りして、私たちは何度でも見直して、やり直して取り組んでいきましょう。

大会概要



開催日:2023.9.19(火)～22(金) 会場:長良川国際会議場(岐阜市)

大会規模:会場1000名、オンライン有 開催地オープン集会を予定!

第7回日本伝道会議のテーマが、6月7日(月)と8日(火)に持たれた日本福音同盟 (JEA) 総会で発表されました。このテーマは、JCE7開催地委員会、JEA理事会、JEA各専門委員会、各教団教派などから御意見をいただきながら、半年をかけてJCE7プログラム局で練り上げてきたものです。

全世界に広がった新型コロナウイルス感染の影響は日本の諸教会にとっても大きなものでした。その間にJEA宣教フォーラム2020や宣教研究部門が各教会にお願いしたコロナ対策アンケートの分析結果、各教団教派の代表者会議や宣教研究部門担当者会議などでいただいた御意見などをもとにしています。

JEA総会のプログラムの中でいただいた御質問などに、少し詳しい説明を加えました。

第7回日本伝道会議 (JCE7) テーマの趣旨説明

「見よ、わたしは新しいことを行う。今、それが芽生えている。あなたがたは、それを知らないのか。必ず、わたしは荒野に道を、荒れ地に川を設ける。」

イザヤ 43:19

「その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。彼らは大声で叫んだ。『救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。』」

ヨハネの黙示録 7:9-10



JCE7プログラム局長
中西雅裕

この二つは終末に繋がる御言葉です

これまで6回に亘って開催されてきた日本伝道会議は、聖書を「信仰と生活の唯一の規範となる神のことば」と信じる福音的な教会が、主イエス・キリストの宣教命令に、互いに力を合わせて従っていくことを目的として開催されてきました。そしてJCE7は、前回のJCE6において提示された「リ・ビジョン」を構築する7年間の準備期間をもち、日本の宣教の方向性を新たに打ち出す使命を担っておりました。

しかしながら、2019年末からコロナ禍に見舞われた社会の生活環境や様式は激変し、キリスト教会もまた、教会のありようや宣教の方策を含め本質的な事柄への問いかけが求められています。ある意味「リ・ビジョン」よりも、むしろ「リセット」という語を意識させられる状況に私たちは生きているのです。

コロナ禍によって受けた教会の諸集会・諸活動の現状は厳しく、神さまが私たちに立ち止まって再考を求められるために様々な事をストップさせられたと言う認識から「リセット」という言葉をあえて使いました。

もちろん、私たちキリスト者にとって、それは神による摂理的な機会と思わされるものであり、それは神の御旨を覚え、皆が御前にひれ伏して神に聞き、上からの方向性を教えていただく大切な時代にあることを意味しています。そこで、今回のJCE7のテーマは、これまでのプロジェクトの働きを評価しながらも、神による全く新たな可能性、いわゆるコペルニクスの転回（発想法を根本的に変えることによって、物事の新しい局面が開かれる

こと)を生み出すものとなることを期待し、プログラム局として以下のテーマを提案するものです。

「おわり」から「はじめる」宣教協力

私たちにとっての「おわり」とは、第一に、今の教会が直面している行き詰まりに等しい状況、つまり今やらなければ後がない状況としての「正念場(おわり)」であり、第二は、神が計画しておられる教会の完成のビジョンとしての「ゴール(おわり)」から考えること、そして第三に、開催地域である「尾張(おわり)」、それは各自の地域の現状から出発するという三重の意味を持っています。

第一の「おわり」は、今の自分たちを見つめ直すことです。例えば次世代にバトンを渡すことなどやらなければならないとその必要は気づいていながら、今まで積極的に対応してこなかった先延ばしにしてきたことを終わりにすることを意味します。現状に危機感をもって臨む姿勢が求められているのではないのでしょうか。

第二の「おわり」は、終末の完成したゴールをはっきり見定め、そこから今を考えることを意味します。聖書の語るゴールを私たちは見失ってはならないのです。

第三の「おわり」は、開催地域の一部である「尾張」の地名を用いさせていただきました。それぞれ各自が

おかれている自分の宣教の地「自分の尾張」から出発することを意味します。現状がどんなに厳しくとも、神さまに遣わされた地として「そこで今できること」から始めていくのです。

そして「はじめる」とは、第一に、日本の宣教の歴史を振り返り、日本の教会に根付いている教会の習慣や文化などを聖書から見直し、捨てるべきものを捨て、終わらせるものを終わらせることを「はじめる」機会とします。第二に、複雑になりつつある社会の変化に目を向けて、災害、環境破壊、少子高齢化、デジタル化、国際政情不安、多文化共生などの課題に教会がしっかりと向き合い、宣教の働きを新たに「はじめる」ことを意味します。そして第三に、このコロナ禍を神の摂理的な機会と受け止め、日本宣教の転換点となる新たな取り組みを「はじめる」時とする、三重の意味を持ちます。

第一の「はじめる」は、コロナ禍を通して立ち止まらされた私たちが現状を考えるために、過去を検証し、信仰生活や教会、礼拝や宣教などを日本の宣教の歴史を振り返りつつ、もう一度聖書に基づいて考え、見直し、変えていくことをはじめることを意味します。本質とは何かを考え、変えていくということです。

第二の「はじめる」は、複雑になってきた社会の変化に目を向けて、様々な課題にしっかりと向き合い、新たな働きをはじめることを意味します。多様化やグローバル化に対する対応です。各プロジェクトに中心となって担っていくことになるでしょうか。

第三の「はじめる」は、コロナ禍を神さまからの強制的リセットをと受け止め、この機会を宣教の転機点として新

たな取り組みをはじめるとを意味します。私たちの意識改革です。デジタル化も新たな取り組みの一つでしょうが、様々な可能性が考えられます。

こうして「おわり」から「はじめる」ために、JCE7においては、日本の教会間協力による宣教を聖書的原則に基づいて、根本から深く考え直してまいります。そして、神が新しく始めようとしておられることへ共に参画していくために、教団・教派及び宣教団体の諸事情や性質、また相克を乗り越えるべく、お互いが胸襟を開いて語り合い、一つの具体的な方向性を共に見出す時としてまいります。

かつて桶狭間の戦いとその後の流れを変えた如く、今回の東海地域で開催されるJCE7において、日本の福音派のみならずキリスト教界の流れを大きく変えようとしておられる神がおられます。その神に互いに聴き、神のみこころを知り、神と共に踏み出す大切な時となることを願いながら、共にJCE7を作り上げてまいりましょう。

JCE7がキリスト教界の流れを変えていく為には準備期間が大切だと考えています。様々なところでのJCE7に向けての準備、共に労する仲間との出会い、準備の為のディスカッション、協力関係の構築を大切にしていきたいと思えます。JCE7当日には、すでによく知っている仲間と本会場、あるいはオンラインで共に集まるのです。そして2030年予定のJCE8に向けてさらに協力して働きを進めていきましょう。神さまが御業をなされる一つひとつのプロセスを御一緒に見させていただきましょ。 「はじめる」ことに向けてのビジョンを与えられて、共に主を仰がせていただきましょ。

第7回日本伝道会議 実行委員会

会 長	石田敏則
実行委員長	小平牧生
開催地委員長	羽鳥頼和
協力推進委員長	細井 眞
プログラム局長	中西雅裕
事務局長	牧野友隆
事務局次長	松島信人
JEA総主事	岩上敬人
JEA担当理事、開催地	内山 勝
委 員	井上義実（協力推進）

祈禱課題

- JCE7を通して日本の諸教会の宣教協力が前進するように
- JCE7を通して東海地域および全国に良い実が結ばれるように
- JCE7をの準備の一つ一つが守られるように
- JCE7を通して主の栄光が現わされるように

献金送付先

加入者名：日本伝道会議
郵便振替：00160-5-483905

第7回日本伝道会議 事務局

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビルJEA気付

TEL：03-3295-1765 (JEA)

Email：jce7@jcenet.org

HP：https://jcenet.org/jce7/





宣教の働きを成される 主の御霊を覚えて



開催地委員会委員長
羽鳥頼和

「神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日わたしは、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。…」使徒 2:17-18

救われた者が、神のみことばを語る者とされるペンテコステの日、聖霊降臨によって人々が「神の大きなみわざ」について語ったとき、ペテロが引用したヨエルの預言のことばです。救われた者が、老若男女みな「神の大きなみわざ語る」ことが約束されていたというのです。救われた者が、聖霊によってイエス・キリストの証人となるという約束のことば（使徒1:8）も同様に救われた者が、主の御霊によって宣教にたずさわることを教えています。みことばがすべての人に宣べ伝えられてから、終わりが来ること（マタイ24:14）、その終わりの時に、神の国が到来することを覚えたいと思います。

キリスト教会は、御霊によって言語など様々な隔ての壁を取り除かれて神の大きなみわざであるキリストの十字架の福音をすべての人々に宣べ伝えることができます。東海地域でも主の御霊が宣教のわざを成し続けられてきたのだと思います。

東海地域での宣教の働き

私の知っている範囲ですが、東海地域の宣教の主のみわざを時代ごとにあげたいと思います。

まず、尾張におけるキリシタンの宣教は、信徒であるコンスタンティ（高山右近の父の家臣）が、60歳で自分の郷里（海部郡美和町花正）に伝道したことが始まりだそうです。

鎖国の時代、漂流した漁師音吉ら（愛知県知多郡美浜町）が、マカオでカール・ギュツラフに協力して和訳の聖書「約翰福音之伝」が翻訳されました。

1908（明治41）年、地久節祝賀式に学校で「君が代」の代わりに「讚美歌」を歌い、「教育勅語」の代わりに「聖書」を読んだとして問題視され、その後苦闘された金城女学院（当時）。戦時下で迫害を受けながら信仰を守り通した美濃ミッション。それらの迫害は、「まことの主なる神以外を礼拝しない」という信仰告白に対するものでした。美濃ミッションへの迫害は、12歳の子が、学校行事の伊勢神宮参拝に行くことを拒否したことによって始まったと聞いています。

主の御霊は、信徒に、高齢者に、そして若者に、神のことばを語らせてくださってきたのです。

私の経験した東海地域での宣教協力

私が信徒であったころ、また牧師になって経験した東海地域での宣教協力を列挙します。

信徒による信徒のための信徒聖書学校（現在東海聖書神学塾へ）。信徒による名古屋朝禱会。ユース伝道は、CCC、そしてKKGK、さらにhi-b.a.が東海地域で活動。またCSK（中学生聖書協会）も。伝道集会として開催されていたヤングクルセードやメンズサパー、婦人ランチオン。日本国際ギデオン協会。信教の自由を考える東海福音主義者の会。東海福音放送協力会（TBA）、東海宣教会議、東海福音フェロシップ（TEF）とTEF災害対策委員会と東海キリスト者災害ネット、ゴスペルや聖歌隊など讚美を通して宣教する団体。超教派キリスト教納骨堂十字ヶ丘復活苑。妊娠・中絶に悩む女性を支援するライフホープネット、小さいのちを守る会。キリスト情報サイトあいちゴスペルネット等々。その他にも、伊勢湾台風のとき、全国から救援活動に参加したキリスト者の奉仕と地域の人々の協力が基となって始まった社会福祉法人名古屋キリスト教社会館。JEAよりも広いキリスト教団体、学校、NGO団体の協力団体である名古屋キリスト教協議会。実際には、はるかに多くの宣教協力が主の御霊によってなされています。

これらの宣教協力は、「すべての人に福音を」というみこころの実現のために主が立ちあげて下さり、用いてくださっているものであり、主の御霊の働きです。

一地域教会の東海地域への宣教のヴィジョン

私の奉仕する教会は、名古屋の一地域教会ですが、東海地域を宣教地として覚えています。それは、教会の草創期に、（東海地域を見渡せる展望レストランで）「これが、お前のフィールドだ」と宣教師から日本人牧師へ伝えられた言葉が、信徒に受け継がれ、教会のヴィジョンとなったからです。教会が最初にコミットしたのは、放送伝道でした。すべての人に福音を伝えるために、キリストの教会の宣教協力のネットワークにできるかぎりコミットできる教会になることを願っています。

東海地域について私が願うこと

御霊によって開催地としてのヴィジョンが与えられ、取り組むべきことが決められるように。今ある宣教を成される主の御霊による東海地域の宣教協力の継続と祝福、さらにみこころなら、新たな宣教協力を生み出すことが出来るようにと願っています。